

## 感情と向き合い続ける看護

### 一言葉を超えて行う看護実践—

関西大学文学研究科身体文化専修

山下 公子

#### 【目的】

本研究のきっかけとなったのは、本研究者が新人看護師であった時に、上司であるT元看護師長が行った、患者が亡くなった臨終の病室で窓を少し開けるという行為であった。その行為の意味を理解したいという思いが、看護師は看護経験のなかでどのような喜びややりがい、悲しみや挫折を経て看護師として成長していくのか、また看護師はどのような感情の下で看護を実践しているのかといった疑問へとつながっていった。この二つの疑問は、看護師は看護師である前に一人の人間としてどのように看護を実践しているのかという一つの問いに集約される。この問いを探求するためこの研究では、T元看護師長を含め4名の看護師に、感情や情動を管理することを前提とする看護の世界で、看護師である前に一人の人間として、感情や情動を織り交ぜながら他者と交流し実践している看護経験を語ってもらった。

#### 【方法】

今回の研究におけるインタビュー対象者は、以前本研究者が在籍していた病棟の看護歴20年から40年の看護師3名と元同僚1名である。4名の看護師にそれぞれ半構造化面接法でインタビューを行い、約30分から1時間にわたってこれまでの看護実践における経験を語って貰った。語られた内容はICレコーダーで録音し逐語録を作成したあと、語りの意味内容から分析を試みた。

#### 【倫理的配慮】

本研究に協力していただいた研究協力者である4名の看護師の名前、所属した病院・病棟名はアルファベットで記し個人が特定されないよう配慮した。また、研究協力者には、ICレコーダーで録音したインタビュー内容を研究目的以外に使用しないこと、研究への協力、参加は自由意志に基づいて、途中で辞退しても不利益は被らないことを記した研究同意書を提示し、それぞれに署名で確認をしてもらった。

#### 【結果】

インタビューの結果明らかになったのは、患者を操作しようとして関わるのではなく、相手の意図を感じ取りながらこの人にとって何が最善の行為であるかを看護師自身が常に自己反省している看護師の姿であった。看護の実践の中でからだを感じる感覚を大切にしているA元看護係長は、患者と接する際は「一人の人間として対応し」「素に戻って」と素直な感情表現を言葉にすることの重要性を語った。またI看護教員は、「シンプルに人を尊重するってどういうことなのかと疑問」を抱きながら自らの看護実践と向き合いそのつど看護を見直し、「その人が満足されるっていうやり取りのなかで、自分がすごく満たされていく」ように患者と交流しながら看護を実践していた。そしてC看護師は「患者さんも同じ方向で、窓をずっと見ていたの。(略)初めて本音じゃないけど「帰りたいな」って言って」とつぶやく患者のありのままを受け止め止めていた。最期の時をその人らしく終えることができるように関わっていたC看護師は、患者が亡くなった後、涙を流し感情を初めて吐露した経験を語った。このように、看護では感情と向き合い続けることが求められるが、感情や情動を織り交ぜながらも常に表現することが躊躇される。それは感情や情動を管理する医療現場であっても、人として看護する上で感情と向き合い続けていくことで、他者や自身の尊厳を大事にすることにも繋がる事が明らかとなった。